かくよむなりと、或物にはかゝれて侍れども、伊勢物語には、みかはの國やつはしといふ所にいたりぬ、そこをやつはしといふことは、水のくもでにて、橋をやつわたせるによりていふ也とかけり、さればくもでといふものゝ、橋にあるゆへにいふにはあらずときこえぬ、そのゆゑならば、まことにいづれのはしにもよみてむ、やつはしにしもよむ、これにかなへり、水のくもでなるとあるは、とかくながれたるにこそ、さてものをとかくおもふによせて、くもでにおもふとはよめる也、

〔拾遺和歌集六別〕源のよしたねが參河の介にて侍けるむすめのもとに、はゝのよみてつかはしける、

もろともにゆかぬみかはのやつはしは戀しとのみやおもひわたらん

〔俊賴口傳集上〕戀せんとなれるみかはのやつはしのくもでにものをおもふころかな

もろともにゆかぬみかはのやつはしをこひしとのみやおもひわたらん

これをもかれをもよそへてくもでといふも、くものてのやつあればなんと申なんめり、されどこのやつはしをたづぬれば、川などにわたしたるはしなどにあらず、あしをぎ生たるうきの道のあしければ、たゞ板をさだめたる事なく、所々にわたしたるなり、それがあまた所にわたしたれば、八つはしといひならはしたるなり、もの、かずはかならず八つとしもなけれども、いひよきにつけてやつとはいふにや、くもでといふは、はしの下によはくてよろぼひたはれもするとて、はしらをたよりにして、木をすぢかへてうちたるをいふなり、それはしにのみうつものにはあらず、たなゝどのあしのゆはくてたわれぬべきにもうつめれば、くもでといふ物はさだめなし、かのやつはしにくもでうつべしとも見えねども、はしいふにひかされてよめるにや、ふるき歌にはさやうにこそはよめれ、又いたをさだめも